刃物の未来 切り開く

中部 ひと模様

ニッケン刃物専務
熊田 祐士さん（32）

伝統と若き発想 融合

受賞スピーチで真っ先に口を突いて出たのは、商品開発に一緒に取り組んだ若い同僚たちへの思いだった。「若手の力を合わせて初めて開発した商品だ。社内に活気が満ちている」。今年1月に「おみやげグランプリ」で、武将の刀をデザインした「日本刀はさみ」が最高賞である観光庁長官賞を受賞した。ありそうで無かったアイデアが外国人観光客や刀剣女子を中心にヒット。「常識外にあるものを作りたい」という思いが実った瞬間だった。

刃物の街、岐阜県関市。祖父の代から続く刃物メーカーの次男として生まれた。7年間勤めた会社を退職し、2014年、家業に入った。安価な外国産商品の輸入増に歯止めがかからない中、「独自の新商品が必要」と考えた。入社翌月には、社内の若手社員を集めてアイデアを集めた。「はさみに刃紋を入れてはどうか」。同僚の一言を受け、すぐに試作品に取りかかる。自宅で針金を使い、骨組みを作り、粘土で整形。織田信長の愛刀をイメージして、絵の具で黒色に塗った。

企画スタートから半年後、東京で開いたギフトショーに「日本刀はさみ」を出品。「これは売れるよ」「面白いアイデアだ」。好評となり、今では京都や浅草のお土産物品店などを中心に月2500本、累計4万2千本を売り上げる。台湾、米国、ドイツなど海外にも販路を広げる。「大手メーカーでは累計250万本の商品もあり、売れ行き自体はスモールヒット。大きいのは全く違う業界を開拓できたこと」という。

最近の目標はクラウドファンディングを利用した新商品の開発。「遊び心を忘れずに、世に出ていない商品を作りたい」。伝統を引き継ぎながらも独創性を忘れず、新しい価値を生み出していく気持ちでいる。

もっとも、刃物業界を取り巻く環境は厳しく、1960年代、関市で一千を超えた刃物メーカーが現在では10分の1程度。刃物職人の高齢化が進み、若手の担い手も減少しており、地域の活性化にも目を向ける。

自身は地元若手経営者ら約160人で構成する関市商工会議所青年部に所属し、仲間たちと一緒に勉強会を開くなど、関市の未来に考えを巡らす。

今月3日には高校生を対象とするビジネスコンテストを開催。県内の高校生が新商品のアイデアを披露し、優秀賞に選ばれたものの商品化を検討するという。新たなヒット商品誕生への期待も膨らませる。「刃物は関市の財産。若者が面白いことに取り組んで街を盛り上げていきたい」と力を込めた。

文 高橋耕平
写真 今井拓也

プロフィル

休日は城巡り楽しむ

1984年、岐阜県関市に生まれる。東京理科大理工学部で経営工学を専攻。卒業後、大手電機メーカーで新製品の企画を担当した。高級炊飯器の企画チームの一員として、他社にはないコンセプトを打ち出す重要性を学んだという。

愛読書は百田尚樹の「海賊とよばれた男」。経営を考える上で刺激になるという。

休日は携帯電話のアプリを駆使し、全国のお城を巡る「城ボーイ」だ。お気に入りの姫路城は「槍で突けるように天井を低くしているのが凄い」。